

「発音と話し方」デジタルポートフォリオの紹介

—ベルギーのオランダ語圏の大学での実践報告—

小熊利江（ゲント大学・お茶の水女子大学）

rieoguma@hotmail.com

【要約】

ベルギーの大学の「現代日本語」科目にて課せられているポートフォリオの内容を再考し、口頭運用能力の習得に焦点をあてた「発音と話し方」デジタルポートフォリオを導入した。本実践では、学生が1学期に5回の短い録音を行い、教師が毎回、学生に発音や話し方に関するフィードバックを個別に行った。学生はそれまで日本語の発音や話し方についてあまり学習したことがなく、「発音と話し方」デジタルポートフォリオの活動は好意的に受けとめられた。

1. はじめに

近年、人の移動のグローバル化やITによるコミュニケーション方法の変化など、人々の外国語学習の環境が変わりつつあるなか、日本語学習のコースにおいてはカリキュラムの内容にあまり大きな変化が見られない。インターネットが普及した過去20年程を振り返ると、学習目標として以前よりコミュニケーション能力が注目されるようになり、『まるごと』に代表されるような言語活動の遂行に焦点を当てた教科書も使用され始めているが、その数はまだ少ない。多くの教育機関では、今も変わらず文法項目をもとにシラバスが組み立てられ、言語運用能力の習得にはあまり重点が置かれていない様子が見られる。特に、口頭言語運用能力の習得については取り組みが遅れていると言える。

しかしながら、日本語を上手に話せるようになりたいという学習動機を持つ学習者は多い。学習者のニーズに応え、また言語能力をバランスよく向上させるにはどのようにすればよいのだろうか。言語習得の効率化の観点からも、学習時間を増やすことなく、より幅広い能力を身に付けられるようにしたいと考えた。このような目的から、筆者の勤務するゲント大学の日本学専攻課程の「現代日本語」科目における課題を見直した結果、従来の学習ポートフォリオ作成課題の内容に再考の余地があることがわかった。

筆者は以前、イギリスの大学のe-learningの音読授業で、大学のオンラインシステム上に学習者による音読の音声ファイルを蓄積するデジタルポートフォリオ活動を行っている（小熊2011）。学習者が自身の音声ファイルを聞いて発音の問題点を見つける「発音セルフチェック活動」を導入した結果、発音に対する学習者の意識が高まる様子が見られた。

この発音セルフチェック活動を参考にして、ゲント大学の「現代日本語」科目の課題として行われている学習ポートフォリオの内容を、口頭運用能力の習得を目的とした内容に変えることを試みた。本稿では、その活動内容を詳細に記述した上で、新たな試みである口頭運用能力の習得を目指した学習ポートフォリオの可能性を探る。

2. ゲント大学の日本学専攻課程

ベルギーのゲント大学には、文哲学部言語文化学科に日本学専攻の課程がある。まず、本実践を行う場であるゲント大学の日本学専攻課程について、以下に紹介したい。

- (a) 課程： 日本学専攻の課程は、学部課程3年制と修士課程2年制からなる。
- (b) 学期： 1年2学期制である。1学期内には12週間の授業に加えて、期末試験期間とフィードバック期間が設けられている。
- (c) 学生数： 2018年度は学部課程1年生59人、2年生44人、3年生19人、修士課程1年生11人、2年生14人の学生が在籍している。学部3年次に半年間の日本への留学をする学生が多い。また、修士課程でも外国の大学に留学する学生が多い。
- (d) 「現代日本語」科目： 日本学専攻課程では、学部3年間と修士1年間において「現代日本語」科目が必修である。学部1～3年次には週7コマ（10.5時間）、修士1年次には週3コマ（4.5時間）の授業がある¹。
- (e) 使用教科書： 学部1年次～2年次前期の「現代日本語」科目では、総合教科書として『げんき』1・2（The Japan Times）を使用し、2年次後期～3年次前期では『中級の日本語』（The Japan Times）を使用している。3年次後期以降は総合教科書を使わず、翻訳やアカデミックライティングなど分野別の教材や生教材を用いている。
- (f) 使用言語： 授業の媒介語としては、基本的に学生の母語であるオランダ語を用いる。オランダ語能力の不十分な学生がいる場合などは英語を用いる。「現代日本語」科目の場合は、媒介語を使わない直接法で教えることもある。

3. 学習ポートフォリオ課題内容の見直しの観点

ゲント大学の日本学専攻の学部課程では、2年次と3年次の「現代日本語」科目（以下、「日本語コース」とする）の課題として学習ポートフォリオを作成することになっている。その位置づけとしては、授業外の学習活動であり、その評価は学期末の成績に組み入れられている。学習ポートフォリオは、大学の学習用オンラインシステム上で提出される。

学習ポートフォリオの課題を再検討するにあたって、従来の課題内容について調査したところ、ポートフォリオの内容はデジタル形式のポートフォリオであることの利点が十分に生かされていないように見受けられた。課題は、指定されたトピックで作文を書いて提出する（2,3年生）、小説や漫画の一部を翻訳して提出する（3年生）など、書いた文章を提出するという形が多かった。つまり、大学に学習用オンラインシステムが導入される前まで紙で提出していた物を、単に大学のシステムにアップロードするようになっただけであった。これでは、大学の学習用オンラインシステムは単なるデジタル提出箱という機能しか果たしていない。まず、この点を改善したいと考えた。

唯一、デジタルポートフォリオならではの課題として、出身地の紹介ビデオを作成する課題（3年生）が出されていたことがわかった。この内容は映像を用いる必要があり、紙上ではできない活動である。本実践では、このようにデジタルポートフォリオの特長を生かすような課題内容にしたい。

ポートフォリオ作成は授業外の活動であるため、普段の授業だけでは習得の難しい分野を付加的に

¹ 2019年から修士課程の「現代日本語」科目は、週4コマ（6時間）に増加した。

扱うことができる。さらに、個別に作成するポートフォリオでは、一斉授業のもとでは対応が難しいような個人差の大きい分野を取り上げることができるという利点もある。これらの要素を考慮して本実践では、個別指導が有効だとされている、発音や話し方の分野に焦点を当てた学習ポートフォリオの作成を行うことにした。

また、これまではポートフォリオの内容について学生自身がふり返しを行ったり、他者からフィードバックを受けたりしたことがなく、学生から教師への提出という一方向の活動であった。ポートフォリオに関する活動に、双方向性あるいは多方向性を持たせることであれば、さらに学習を促進することができるのではないかと考え、これを2つ目の改善点とした。

4. 「発音と話し方」ポートフォリオの概要

4. 1 実践の対象となる日本語コース

本実践の対象となる日本語コースは、以下のとおりである。

対象： ベルギーの大学で日本学を専攻し、日本語コースを履修する学生

時期： 3年次の後期（2018年2月～5月）

人数： 6人²

母語： オランダ語

日本語レベル： 中級の下～中（CEFR³：B1）

4. 2 ポートフォリオ作成の方法

3年次の後期に、学生に「発音と話し方」ポートフォリオ作成の課題を与えると同時に、授業内では発音と話し方に関する指導を行った。「発音と話し方」ポートフォリオ作成の手順は、以下のとおりである。

【授業内の指導】 2週間に1回、10-15分の時間を使って日本語の発音と話し方の知識を導入して練習を行う。指導の内容は、主にリズム、特殊拍、アクセント、イントネーションなどに関するものを扱う。

【授業外の活動】 学生は、指定されたトピックについて30秒以内で話をして録音する。その録音を大学の学習用オンラインシステムにアップロードする。

【教師の役割】 個々の学生の録音を聞き、発音や話し方に関する30秒以内のフィードバックを各学生に向けて個別に録音して、同じく大学の学習用オンラインシステムにアップロードする。

【回数】 1学期12週間に、学生の録音と教師からのフィードバックの録音を5往復行う。

【ふり返し活動】 学生は学期末に、ポートフォリオ内の自分の録音と教師のフィードバック全5回分を聞いて、自分の発音と話し方の変化を観察して評価する。

² ポートフォリオ作成活動を始めた学生は10人であったが、最後まで活動を行った学生は6人であった。

³ CEFRとは、ヨーロッパで開発された Common European Framework of Reference for Languages の略である。言語能力レベルの評価の規準が示されている。

4. 3 「発音と話し方」ポートフォリオのトピック

学生が録音する話のトピックは、発音や話し方に注意を向けられるように、簡単な内容で、学生が話し慣れたものが適切であると考えられる。また、できるだけ自然な会話に近くするため、聞き手（教師）の知らない話の内容でインフォメーションギャップが生じるようなものが相応しい。これらを考慮して、トピックは「1. 自己紹介」「2. 私の町」「3. 私の国」「4. 私の趣味」「5. 私の好きな物」の5つを選んだ。

4. 4 教師フィードバックの方法

教師は、各学習者の録音を聞き、口頭で30秒以内のフィードバックを行い録音する。フィードバックの際には、なるべく自然な会話に近い状況を心掛け、学生の録音内容に対して学生との対話を楽しんでいるような感想を一言入れることを留意した。その上で、30秒という短い時間であるため、発音や話し方について注意するポイントを1点に絞ってフィードバックを行った。注意するポイントは、できるだけ授業で扱った内容にした。

各学生の発話と教師のフィードバックの全ての録音ファイルを、学生の了解の上で大学の学習用オンラインシステム上にアップロードして、クラス内で公開した。クラスの他の学生のものも聞けるようにすることで、他の学生にはどんなフィードバックがされているのだろうか、と興味を持って聞くことを促す目的である。それにより、日本語の発音や話し方への意識が高まり、学習効果が増大することを狙った。

教師によるフィードバックの録音とアップロードには当初、学生1人につき10分余かかっていたが、作業に慣れるにつれ1人5分程で行えるようになった。

4. 5 ふり返り活動の方法

ふり返り活動の目的は、自分の発音や話し方の状態や変化を把握することにより、自分の学習目標を見つけることである。学生は学期の最後に、ポートフォリオ内の自分の録音と教師のフィードバックを5回分聞いて「ふり返りシート」を記入する。「ふり返りシート」の評価の観点は、一般に発音と話し方の評価項目とされている①単音、②長音、③撥音、④促音、⑤アクセント、⑥イントネーション、⑦リズム、⑧流暢さ、⑨聞きやすさ（明瞭性）、⑩わかりやすさ（理解しやすさ）の10項目とした。これら10項目の観点を明示することにより、日本語の発音と話し方において重要な要素と着眼点を学生に認識させることが目的である。

「ふり返りシート」では、自分の発音と話し方について10項目の観点ごとに「とても良くなった」「良くなった」「変わらない」「悪くなった」の4段階で自己評価する。それに加えて、「ふり返りシート」には自由記述の欄が設けられている。

5. 学生による発音と話し方のふり返りと自己評価

「発音と話し方」ポートフォリオの課題を通して、学生は自身の発音と話し方の学習についてどのように自己評価を行っただろうか。6人の学生の「ふり返りシート」の自由記述のコメントを、以下に紹介する。

学生A：「I think I mostly struggle with paying attention to accents and intonation.」（アクセントとイン

トネーションに注意を払うことに最も苦勞しています。) ⁴

学生 B : 「Thank you for your feedback. I learned a lot of things that I didn't notice before, like the pronunciation of my ん sound and long vowels that I now know I need to pay attention to. 教えてくれてありがとうございます。」 (フィードバックをありがとうございます。「ん」の音や長音の発音など、以前は気づかなかったことをたくさん学びました。今は、それらに注意を払う必要があるということを知っています。教えてくれてありがとうございます。)

学生 C : 「I wish I had practiced my pronunciation a little more at home throughout the year, because when listening to my portfolio, I still notice some flaws. I enjoyed the portfolio exercises nonetheless, even though sometimes I had to push myself a little to start on them. I think they are a great way of improving general speaking skills. Hearing yourself speaking Japanese is an eye-opener!」 (自分のポートフォリオを聞いてみて、まだいくつか欠点があることに気づいたので、1年を通して自分の発音をもう少し家で練習すればよかったです。ときには、作業に取りかかるのに自分をプッシュしなければいけないこともありましたが、それでもポートフォリオの練習は楽しかったです。一般的な話す能力を伸ばす方法として、とてもいいと思います。自分が日本語を話しているのを聞くのは、目から鱗が落ちる思いです！)

学生 D : 「大学では2年間発音についてはあまりなかったが今学期は色々な面白いことを学んだ。小さいアクセントが好きなので、ぜひ将来今学期の学んだことを使おうとする。」

学生 E : 「今学期の会話の授業はとても便利でした。初めてにアクセントとイントネーションについて習いました。シーディーで会話の練習はすごく面白かったです。たくさん大切なことを習ったと思います。でも日本語のリズム、イントネーションとアクセントは西洋人としてとても習いにくいです。だから授業でたくさん練習したことはとてもいいことです。」

学生 F : 「今学期の会話の授業は本当に面白かったです。日本語の話し方についてすごく勉強になりました。ありがとうございました。日本語で会話をするのは、まだ難しいですけど、先生のおかげで、少しずつ上手になっています。ベルギーでは、日本語を話せるチャンスがあまりないので、できるだけクラスで話すことに集中すればいいと思います。」

学生たちは、それまで日本語のアクセントやイントネーションについて学んだことがなく、それらに注意しながら発音することに苦勞したというコメントが見られた。それと同時に、日本語の話し方に関して新たな学びや気づきが起こった様子も見られた。これらの記述から、学生 6 人全員が新たに導入された「発音と話し方」ポートフォリオ作成の活動を積極的に捉え、学習対象とその重要性を理解して課題に取り組んだことが見て取れる。

⁴ 自由記述部分は原文のまま記した。英語で記されたものは、筆者が日本語に翻訳して括弧内に記した。

6. おわりに

今回、ベルギーのアントワープ大学の日本語コースのポートフォリオ課題の内容を調べて再検討した。従来行われていたポートフォリオでは、文章を書く課題が多いことがわかった。それは、大学の学習用オンラインシステムが導入されたにもかかわらず、紙媒体で提出していたポートフォリオを、そのまま大学の学習用オンラインシステムにアップロードするという形式だけの変化であった。

本実践では、大学の学習用オンラインシステムを使用したデジタル形式のポートフォリオの利点を生かして、紙媒体ではできない口頭運用能力の向上に焦点を当てた課題内容を設定した。初めての試みとして導入した「発音と話し方」デジタルポートフォリオについて、その実践の内容や方法を詳しく紹介し、他の教育現場において参考になるよう情報を共有した。また、学生のポートフォリオ作成活動を内省する「ふり返しシート」の自由記述の内容を紹介し、「発音と話し方」デジタルポートフォリオ課題が学生たちに新たな学びをもたらしたこと、および課題が概ね好意的に受けとめられたことを示した。

しかしながら、今後も本デジタルポートフォリオ作成活動を継続するにあたって課題もあると考えられる。例えば、録音の回数は1学期に5往復としたがそれは適当だったのかという頻度の点、また授業内の指導の内容はこれでよかったのか、教師によるフィードバックの内容は適切だったかなど指導内容に関する点がある。今後、これらの課題について検討を行い、運用を最適化できるように調整して、「発音と話し方」デジタルポートフォリオの実践方法を改善していきたいと考える。

参考文献

- 小熊利江 (2011) 「e-learning 音読授業における『発音セルフチェック活動』の実践」『BATJ Journal』12, 1-13. 英国日本語教育学会
- 国際交流基金 (2013, 2014, 2015, 2016) 『まるごと 日本のことばと文化』シリーズ, 三修社
- 坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子 (2011) 『げんき』1・2, The Japan Times
- 三浦昭・マグロイン花岡直美 (2008) 『中級の日本語』, The Japan Times
- 森本康彦 (2008) 「e ポートフォリオの理論と実際」『教育システム情報学会誌』25 巻 2 号, 245-263. 教育システム情報学会